

古代イスラエルの一神教をめぐる問い

—考古学とテキストの間で—

エリザベス・ブロッホ＝スミス

要旨

考古学者は、紀元前8世紀後半から6世紀の古代イスラエルで台頭した一神教をめぐる議論に多様な視点を呈示し、新しい形の様々な証拠を提供してきた。テキストが書かれ受容された歴史的な脈を明らかにするとともに、当時信仰がどのように実践されていたかを解明する上で考古学は大きな貢献を果たしている。そのことを如実に示す2つの考古学研究がある。一つは8世紀後半のアッシリア軍に関する研究で、その侵攻が礼拝所をエルサレムに一本化する動きや預言者たちの訴えに及ぼした影響を考察したものである。もう一つは、ユダ王国の南の境に位置するアラド要塞の発掘調査で、この調査により前哨基地の神殿で動物供犠や石柱（立石）崇拝などの宗教儀式が行われていたことが明らかになっている。この2件の考古学研究により、信仰の実践と聖書の記述の両面から、一神教が台頭した背景に対する理解が深まっている。

キーワード：センナケリブ、アラド、一神教、考古学、聖書

考古学者は、紀元前8世紀後半から6世紀の古代イスラエルで台頭した一神教をめぐる議論に多様な視点を呈示し、新しい形の様々な証拠を提供してきた¹⁾。テキストが書かれ受容された歴史的な脈を明らかにするとともに、当時信仰がどのように実践されていたかを解明する上で考古学は大きな貢献を果たしている。そのことを如実に示す2つの考古学研究がある。一つは8世紀後半のアッシリア軍に関する研究で、その侵攻が礼拝所をエルサレムに一本化する動きや預言者たちの訴えに及ぼした影響を考察したものである。もう一つは、ユダ王国の南の境に位置するアラド要塞の発掘調査で、この調査により前哨基地の神殿で動物供犠や石柱（立石）崇拝などの宗教儀式が行われていたことが明らかになっている。この2件の考古学研究により、信仰の実践と聖書の記述の両面から、一神教が台頭した背景に対する理解が深まっている。

アッシリア軍の遠征と古代イスラエルの信仰の一本化

8世紀後半の約13年の間に、ティグラト・ピレセル3世、シャルマネセル5世、次いで

サルゴン2世率いるアッシリアの軍隊が、イスラエル、ペリシテ、ユダの都市や町に次々と攻め入った。ティグラト・ピレセル3世はその王碑文13の中でこう語っている。「前回の進軍では〔Bit Humriaの土地〕のすべての都市を破壊し〔地にねじ伏せ〕〔中略〕その家畜を奪った。侵攻を免れたのは（人里離れた）サマリアだけであった」²⁾。しかし考古学調査の結果、すべての居住地が同じ運命をたどったわけではないことが明らかになっている。アッシリア軍は幹線道路を進軍し、道路沿いの戦略的要衝や行政の拠点を攻撃した。壊滅的被害を受けた土地もあれば、城門と近辺の城壁（あるいはそれに加えて宮殿や貯蔵庫）だけが破壊され、深刻な打撃を免れた都市もあった。おそらく住民を降伏させるにはその都市の砦を落とすだけで事足りたのだろう。あるいは砦を破壊するという行為が、降伏した都市に屈辱の印を与えることになったのかもしれない。現実には、メギドやサマリアなど行政の拠点として利用できそうな場所には被害らしい被害は及んでいない。以上の証拠により、広範な土地を破壊し尽くしたというアッシリアの記録が誇張であったことが露呈するとともに、アッシリア軍が実際に及ぼした被害の規模と、エルサレムの救済という一見奇跡的な出来事が事実であったことが裏付けられている³⁾。

ティグラト・ピレセル3世の遠征にさかのぼってこの考古学的証拠をもう少し詳しく検討してみよう。聖書のテキストとアッシリアの記録によると、アッシリア軍がこの一帯に初めて遠征したのは紀元前734年のことであった。この出来事は「シリア・エフライム戦争」として知られている。このときティグラト・ピレセル3世は海岸沿いにガザまで南下し、その途上でペリシテやユダの戦略拠点を攻め落とした（王碑文8）⁴⁾。次いでアッシリアはサマリアと北部の領土、すなわち「サマリアを除く Bit-Humria のすべての都市」を支配下におさめた（年代記18）。列王紀下15:29には上ガラリヤ地方の町の名が列挙されており、アッシリア年代記18と24には、これに加えて下ガラリヤ地方の町が記載されている⁵⁾。アッシリアが征服した土地を次々と領土に組み込んでいく中で、イスラエルはサマリアを中心とする一残滓国家になり下がった。イスラエル全域に及んだティグラト・ピレセル3世の遠征による部分的・全面的な破壊層が、海岸沿いや（Acco、Shiqmona、Dor、Tell el-Qudadi、Ashkelon）や北部地域（Dan、Hazor、Chinnereth/Tel Kinerot/Tell el-Oreimeh、Beth-Shean、Tel Rehov、Geshur/Bethsaida、En Gev、Chinnereth）で発見されている。このうち Hazor はアッシリアにより徹底的に破壊されたが、Dan、Chinnereth、Beth-Shean は限定的な被害を受けるにとどまった。すべての居住地が焼失したり放棄されたりしたわけではなく、少数の住民が細々と暮らしていたところも含め（Yoqneam）、鉄器時代の末期まで存続した集落もあった（Tel Par、Rosh Ha'Ayin、Horbat Eli、Nahal Barqai）⁶⁾。

そのおよそ12年後、紀元前722年から721年にかけてアッシリアのシャルマネセル5世、次いでサルゴン2世がサマリアを包囲し、陥落させた。こうしてイスラエル王国は独立国の立場を失いアッシリアの属領となった。この出来事は、聖書（列王記下17:5-6；18:9-11）やアッシリアの王碑文、ニムルドの角柱碑文にも記録されている⁷⁾。なお考古学調査により、アッシリアはイスラエル中心部の選ばれた主要都市（Dothan、Shechem、Tell el-Far'ah (N)）を破壊したが、行政の拠点として利用するために首都サマリアは破壊せずに残しておいたことが明らかになっている⁸⁾。

サルゴン2世は、サマリアだけでなくペリシテの都ガザなど、はるか南の都市も征服したと豪語し、自らを誇らしげに「遠く離れたユダの地の支配者」と呼んでいる⁹⁾。確かに「王碑文」や年代記53-57、宮殿の壁面レリーフ、アシュドドの記念碑には、サルゴン2世がガザをはじめはるか離れた南の都市を征服したことやラフィアで闘ったことが記されているが、ペリシテの町が破壊されたという事実はなかったことが考古学調査により証明されている¹⁰⁾。

細部に食い違いはあるものの、センナケリブが紀元前701年に進軍を開始しヒゼキヤ王の治世のエルサレムを包囲したことは、アッシリアの文献にも聖書にも記されている。聖書には「アッシリアの王センナケリブが攻め上り、ユダの砦の町をことごとく占領した」（列王記下18:13；イザヤ書36:1）と書かれており、またセンナケリブ自身も「私は、防備を固め城壁で囲まれた彼の都市のうち46の都市と、周辺の無数の小さな町々を包囲し」、200,150人以上を追放したと高言している¹¹⁾。またエルサレムを攻めない見返りとして身代金が支払われたことが聖書とアッシリアの文献に記されており、ヒゼキヤ王が支払を最小限にとどめたことと（列王記下18:14-16）、センナケリブが身代金となる品物と人質についてこと細かく定め、指示したことが伝えられている¹²⁾。注目すべきことは、防備を固めた数多くの町や都市がアッシリア軍に占領されたのに対し、エルサレムは無傷で、その存在感を示していたことである。

地層に残された破壊の痕跡をセンナケリブ軍によるものと判断する根拠は、陶片の類似性と *lmlk* の印の存在、そしてラキシユ陥落の様子が描かれたセンナケリブのレリーフである。センナケリブは、紀元前701年のラキシユ侵攻の惨状をレリーフに描かせ、ニネヴェの宮殿の壁面に飾っていた。闘いの様子を記録したこのレリーフにより、ラキシユの発掘調査を行った研究者たちは、破壊層から出土した陶片が紀元前8世紀末期のものであると結論し、また他の場所で発掘された陶片との類似性を根拠に、センナケリブ軍による破壊が他の地域にも及んでいたことを明らかにした。さらにラキシユの破壊跡やユダ王国の各所で出土した甕の取っ手に「王の所有に帰する」を意味する *lmlk* という印が刻まれていたことから、研究者たちは、アッシリアに対する反乱に備えてヒゼ

キヤ王が計画的に食糧を備蓄していたと考えている¹³⁾。

センナケリブ軍は低地シェフェラと、道路が合流する北部ネゲヴの各地を手中に収め、高地を包囲してエルサレムを孤立させた (Beit Mirsim、Batash、Beth Shemesh、Aitun/Eton)。この地域一帯で行われた発掘調査の結果、アッシリア軍により土地が分断され、放棄されたことは確認されたが、破壊が広い範囲に及んだ痕跡は認められなかった。しかしアッシリアもユダ王国も、被害の規模をことさらに誇張した記録を残している。被害が大きければ大きいほどアッシリアは軍事力の高さを誇示することができ、またユダ王国は、エルサレムを奇跡的に救済した神のみ業を称えることができるからである。記録に残されているほど大きな被害を及ぼさなかったとはいえ、センナケリブ軍はシェフェラ各地の要塞を攻撃し、エルサレムを孤立させ、エジプトからの援軍派遣を阻止するとともに、東西の通商路を分断した。初期の遠征と同様に、城門や近隣の建物、公共の施設だけが破壊された都市もあったが、ラキシユのように壊滅的被害を受けたところもあった。その一方でエルサレム北部の丘陵地帯の要塞都市をはじめ、幾つかの都市は被害を受けることなくその後も存続した¹⁴⁾。幹線道路から外れた農地もアッシリア軍の攻撃を免れた。シェフェラ一帯では多くの土地が放棄されたが、北はサマリアから南はヘブロンに至る地域では、紀元前8世紀から7世紀にかけて破壊を受けた痕跡が残る農地は一つも発見されていない。包囲と戦闘が長引く中、アッシリア兵はこの一帯の農地から食糧などの必需品を調達していたものと思われる。一方地方部の住民はアッシリア軍の侵攻を受けることなく、その地に暮らし続けた¹⁵⁾。

考古学的資料の検証により、アッシリア軍の及ぼした被害の範囲と規模が解明され、紀元前8世紀後半から7世紀前半にかけての為政者の政策と預言者の活動の背景が明らかになっている。アッシリアはイスラエルを壊滅させたわけではなく、幹線道路を進軍しながら、要塞や行政拠点を破壊して行った。軍はサマリアやエルサレムなどの首都や近隣の主要都市を攻撃したが、高地に攻め入ることはせず、また村落や集落、農地を攻撃することもなかった。これに対しシェフェラ地域など一部の地域では、センナケリブ軍の侵攻を受けて住民が故郷を捨てたケースもあった。

こうした破壊的な進軍はどのような影響を及ぼしたのだろうか。土地が荒廃し、北王国が独立を失い、エルサレムが一見奇跡的に救済されたことが重なって、エルサレムではヤハウエ礼拝の一本化に向けた機運が大いに高まった。アッシリア軍の侵攻は、ヤハウエとの契約に背いた北王国のイスラエル人に対する罰であるという考えが広まり、宗教改革を正当化した。またほとんどの宗教拠点や行政拠点が破壊されたのに対してエルサレムだけが無傷だったことから、エルサレムこそヤハウエに選ばれた都市であり、ヒゼキヤは神に定められた地上の支配者であるという確信が生まれた。宗教的資源をエル

サレムに集約することは、アッシリアへの反逆に備えて王が体制を整える上でも好都合であった。このように紀元前701年をピークとするアッシリアの進軍は、ヤハウエ礼拝をエルサレムに集中させることをヒゼキヤ王に決意させたのである。同時にイザヤやホセアなど、アッシリアの重大な脅威に直面した紀元前8世紀の預言者たちは、より大きな危機感をもってイスラエル人に行いを改めるよう訴えた。さもなければヤハウエの罰が下ってイスラエルはアッシリアに蹂躪されるだろうと警告したのである（イザヤ書8:5-8a；ホセア書9:3）。このように、ヒゼキヤ王の宗教改革と、神との契約を守るようイスラエル人に呼びかけた預言者たちの訴えについては、考古学的資料によってその背景が明確に裏付けられているのである。

ヤハウエ礼拝におけるアラド神殿と石柱（立石）

ユダ王国の南の境に位置するアラドには王の要塞が築かれており、神殿が併設されていた。発掘調査により、この神殿の起源は紀元前10世紀後半から7世紀にさかのぼると推定されている（年代については以下に詳しく論じる）¹⁶⁾。この境の神殿は王の命によりヤハウエのために造られたものであったが、その中心となるのは1本の石柱（立石）であった。この事実により、王がエルサレムに礼拝の拠点を一本化したことやヤハウエの象徴の問題、ならびに出エジプト以前のイスラエルで様々な信仰が実践されていたことについて、幾つかの疑問点が指摘されている。ここではまずアラドで発掘された考古学的証拠について検証し、その後ヤハウエ礼拝における石柱というより広い問題について論じてゆく。先の例からも分かるように、考古学的証拠は、聖書テキストを理解するための歴史的な文脈と、古代イスラエルの信仰の代表的特徴—この場合は神殿と石柱—を解明するための手がかりを与えてくれるのである。

東側から神殿に入ると広い中庭（12.0×7.5m）に出る。中庭の北面沿いには予備の部屋が作られている。中庭内には自然のままの石を泥で塗り固めた祭壇（2.40×2.20×1.5m 高）が設けられており、その近くに香炉、大型のランプ、3体のユダの柱像の破片、うずくまるライオンを模した小さな青銅像—おそらくメソポタミア製の文鎮と思われる—が置かれている¹⁷⁾。中庭を横切ったところに縦長の大部屋（10.5×2.9m）があり、西側と南側の壁面に長椅子が置かれている。この部屋の奥壁の中央には神殿の中心軸に沿って階段が設けられており、階段を上り切ったところが壁龕（1.80×1.10m）になっている。この壁龕の中にアーチ形の石灰岩の柱が立てられていた。この柱はおそらく石柱と思われ、高さ0.90m、表面は平らで、背面と両側面は丸みを帯びており、片側に赤い顔料が塗られていた痕跡がある。またこれよりも小さな2つの石が壁龕に漆喰で

塗り込まれていた。いずれも特徴的な形に加工された燧石で、おそらくこの3つが石柱の機能を果たしていたものと思われるが、燧石のいずれか一方またはその両方が構造上の必要性を満たすためのもので、宗教的な意味合いはなかった可能性も高い。壁龕入口の両側には元々2つの石製の香壇が置かれていた。大きさは0.50m × 0.30m 高で、彫刻が施されており、壇上には有機物が燃やされた痕跡が残っている¹⁸⁾。この2つの香壇の存在から、壁龕内に2つの石柱が立てられていたという推測が成り立つ（あくまでも推測であり、決して確証ではない）。

この神殿がいつ建設され、破壊されたかについては、考古学者の間でも意見が分かれている。これは神殿構造物の一部が崩れて下層の水系に水没してしまい、神殿跡とその直前・直後の時代の地層から出土した陶器群の区別が難しいためである。発掘調査に携わったある研究者は、この神殿は宗教改革の一環としてヒゼキヤ王とヨシヤ王の2つの時代に段階的に解体された（列王記下18、23）と主張しているが、要塞の残りの部分と共に一度に解体または破壊されたと考える考古学者もいる。はっきりしているのは、この神殿がおそらく紀元前10世紀ないし9世紀に造られ、紀元前6世紀前半頃まで存在していたらしいということだけである¹⁹⁾。その一方で、紀元前8世紀後半に機能していた王の神殿に、少なくとも1本、おそらく2本の石柱が壁龕の中に設けられていたことについては、意見が一致している。

アラドの石柱は、エルサレム神殿の至聖所に相当する建造物として立てられていた。この事実は、歴代のエルサレムの王たちが、イスラエル人の石柱崇拜の拠点となる神殿を庇護していたことを物語っている。またアラド要塞で発見された兵士間の書簡から、この大型石柱に顕現する神が、書簡中で召喚される唯一の神ヤハウエであったことが分かっている。（「あなたにヤハウエの恵みがありますように」(#16)、「ヤハウエがあなたに幸せをもたらしますように」(#18)、「あなたにヤハウエの加護があるよう祈ります」(#21)）。さらに神の名に El (Elyashib、Elisha) や Yahu/Yehu (Hananyahu、Ge'alyahu、Azaryahu、Eshyahu、Shemaryahu、Yehukal、Malkiyahu、Yermiyahu、Nehemyahu) という文字が入っていることも、この神殿の壁龕に祭られていたのがユダ王国の守護神であったことを確証している²⁰⁾。

壁龕に2本の石柱が立てられていたのだとすれば、そこに祭られていたのはヤハウエだけではなかった可能性がある。アラドの神殿で発見された2つの香壇と4つのユダの柱像、そしてエルサレム神殿におけるヤハウエとアシラ（アシラ像）の関係（列王記下23:6）を考慮すると、2本目の小さな石柱はアシラ（アシラ像）の象徴であると考えてよいだろう。

正確な年代は確定できないものの、アラド神殿の存在は古代イスラエルの宗教をめぐ

る議論に大きな一石を投じてきた。エルサレム以外の場所に王家が聖所を造り、維持していたという事実は、ヤハウエに犠牲を捧げる正規の礼拝所をエルサレムに集中するという申命記の理想に反するものである。さらに中央の壁龕に立てられた石柱は、エルサレムのケルビム、ダン神殿とベテル神殿の子牛（列王記上12: 28-30）と並んで、ヤハウエの顕現の象徴となっている。おそらくこの石柱は、イザヤの預言に語られた柱のように、その地の南の境と民を定め、守護しているヤハウエを象徴していたと考えられる（イザヤ書19:19-20）。アラドの神殿は宗教改革の一環として解体されたのであろうが、ここが王家の庇護を受けた神殿、犠牲を捧げる聖所として存在していたこと、それが聖書では言及されていないこと、そして、かつ石柱が崇拜の対象になっていたことは、聖書の物語に異議申し立てをするものである。

聖書の記述の年代を確定することが難しいことから、ヤハウエ信仰と石柱に対する以下の理解は、一つの慣行が発展し、広く伝播したことを示唆していると考えられる。青銅器時代中期から鉄器時代にかけて、古代イスラエル人、その先人ならびに近隣の民は様々な状況下で、寺院や神殿（Umayri、Shechem、Bull Site、Hazor、Atarot、Arad）、都市の城門などの公共の場（Dan、Bethsaida）、家庭の中庭（Rehov）、街路／通路（Lachish）など、ヨルダン川の東西に石柱を立てた²¹⁾。紀元前8世紀の後期になると、この一帯で石柱が立てられることはほとんどなくなったようである（紀元前12世紀から8世紀にかけて造られた石柱のうち、検討に値する例は15にも満たない）。

ヤコブの物語（創世記28:16-18；31:45、51-2）、ホセア書（3:4；10:1-2）、ミカ書（5:12）、イザヤ書（19:19-20）、古代イスラエルの掟（出エジプト記23:24；申命記12:2-3；16:21-22）、申命記史家的歴史（列王記下3:2；18:4；23:13-14）など、聖書のテキストの中には、ヤハウエの象徴として石柱を肯定している記述もあれば、他の神々を祭った石として批判している記述もある。聖書の中で受け入れられている石柱は様々な役割を果たしている。あるものは神聖な印として神の顕現となり、またあるものはヤハウエ、エロヒーム、祖先神など、見えざる神の存在を象徴していた（創世記28:11-18；31:44-53；35:13-15）。神の土地所有権を主張するために、石柱が神の土地の境界石の役割を果たしている場合もあれば（創世記31:52；イザヤ書19:19-20）、「これはまさしく神の家である」（創世記28:17）というヤコブの言葉が表すように、神殿や神の住まいとみなされた石もあった。また神の象徴以外では、12支族の記念としてシナイ山に石柱が立てられたり（出エジプト記24:4b）、ラケルやダビデ王の息子アブサロムなど重要人物のために石柱が設けられたりしたケースもある（創世記35:20；サムエル記下18:18）。

イザヤとミカはいずれもヒゼキヤ王の治世に活躍したユダ王国出身の預言者である

が、紀元前8世紀後半には石柱をめぐる2人の見解は対立していた。イザヤが神の印としてヤハウエの石柱を肯定していたのに対し（イザヤ書19:19-20）、ミカは偶像崇拝の対象であるとして石柱を否定していた（ミカ書5:12）。ミカ書のこの一節が紀元前8世紀後半にさかのぼるのであれば、これはヤハウエの石柱に対する初期の糾弾ということになる。もっともここにヤハウエという名が具体的に述べられているわけではなく、石柱がヤハウエを象徴しているのかどうかは定かではない。

一方紀元前7世紀から6世紀の申命記史家たちは、石柱は異邦の神々を祭った石である、あるいはイスラエル人が土着の儀式を模して建てたものであるとみなし、これを非難した（列王記下10:26-27；17:9-11；23:13-14）。しかし様々な要素を勘案すると、こうした非難はあくまでも論争のためのものであり、おそらく二次資料やそれ以降の後期資料を根拠としていたものと思われる。立石は「あらゆる高い丘の上と、茂った木の下」という決まり文句とともに記述されており（列王記上14:23；列王記下17:10）、ヒゼキヤ王とヨシヤ王の宗教改革にも関わっているが、立石を設けたことがはっきりしているのは、歴代の王の中でもレハベアム王ただ一人である（列王記上14:23；列王記下18:4；23:13-14）。申命記史家たちは、土地を奪われた国民の慣習に過ぎないとして立石を軽視しているが、ヤコブやモーセの事例を都合よく無視している。

しかし、異邦の神を祭った石柱を否定する申命記史家でさえ、選ばれた一部の石（おそらく由緒あるもの）だけはヤハウエに由来するものと認め、これを *'eben*（石）と呼んで *massebah*（石柱）とは区別している。彼らがヤハウエと12支族の印と認めている石には次のものがある。ヨシュアがヨルダン川から取るように命じた12の石（ヨシュア記4:4-9）。ヤハウエと民の契約の証しとしてシケムに立てられた石（ヨシュア記24:25-27）。ヤハウエの印として境に置かれたサウル王の「助けの石」（サムエル記上7:12）。このように申命記史家たちは、ヤハウエにまつわる神聖な立石を別の名で呼ぶということによって、その存在を受け入れていたのである。

アラド神殿と石柱は、紀元前8世紀から6世紀にかけてヤハウエ信仰が発展していった経緯を私たちに伝えてくれる。エルサレムの王家はユダ王国の南の境に位置する第二の神殿を認め、庇護していた。イスラエルの北と南の境に造られたヤロブアム王のダン神殿とベテル神殿のように、エルサレム神殿とアラド神殿もまたユダ王国の北と南の境を示す印となっていた。至聖所エルサレム神殿と対になる中央の壁龕には1体ないし2体の石が祭られていたが、その1つはユダ王国の守護神ヤハウエの象徴であり、もう1つは女神アスラか、ヤハウエの中に取り込まれたアスラの力を表していたものと思われる²²⁾。当時活躍していた預言者のうち、イザヤはこの慣習を受け入れていたが、ミカはこれを糾弾していた。また申命記史家たちはこの伝統を見下す一方で、一部の選ばれた石には

別の名を与え、その意義を認めていた。

結論

考古学は、古代イスラエルの中立的な目撃者として、聖書のテキストが作られ、人々に理解された歴史的文脈を再構築することを可能にする。甚大な被害をもたらしたアッシリア軍の遠征は、ヒゼキヤ王が改革を決意するきっかけとなり、預言者の言葉にも影響を与えた。テルアラド遺跡の発掘調査では、石柱や神殿など（聖書に記載されていない）古代イスラエルの特徴を明らかにするとともに、聖書の執筆者や編纂者が述べている信仰の実態や慣行を解明する上で貴重な資料が発見されている。本稿で取り上げた2件の研究が示すように、物理的な遺物と文献を併せて調べることにより、紀元前8世紀後半から6世紀にかけての宗教慣行の実態とその歴史的背景に光を当て、ダビデの王国の最後の数世紀にヤハウエ信仰がどのように発展していったかを明らかにすることができるのである。

注

- 1) 本稿の年代はいずれも紀元前である。
- 2) L. Younger, "Tiglath-pileser III" in W. Hallo ed. *The Context of Scripture*, vol. 2, *Monumental Inscriptions from the Biblical World*. Leiden: Brill, 2000, pg. 292.
- 3) 詳細については以下の著作を参照。Elizabeth Bloch-Smith, "Assyrians Abet Israelite Cultic Reforms: Sennacherib and the Centralization of the Israelite Cult" in J. David Schloen ed. *Exploring the Longue Durée: Essays in Honor of Lawrence E. Stager*. Winona Lake, IN: Eisenbrauns, 2009, pp. 35-44.
- 4) H. Tadmor, *The Inscriptions of Tiglath-Pileser III King of Assyria: Critical Edition with Introduction, Translations and Commentary*. Jerusalem: Israel Academy of Sciences and Humanities, 1994, pp. 176-79.
- 5) Younger, "Tiglath-pileser III" pp. 286, 288, 291, 292; Tadmor, *The Inscriptions of Tiglath-Pileser III* pp. 81-83, 201-03.
- 6) Z. Gal, "Tel Par" *Excavations and Surveys in Israel* 15 (1995) 33; H. Hizmi, "Horbat 'Eli" *Excavations and Surveys in Israel* 18 (1998) 51-52*, 74-75 (Hebrew); R. Avner-Levy and H. Torge, "Rosh Ha-'Ayin" *Excavations and Surveys in Israel* 19 (1999) 40*, 58-59; S. Givon, "Nahal Barqai" *Excavations and Surveys in Israel* 15 (1995) 88-90; "Nahal Barqai 1996-1997" *Hadashot Arkheologiyot* 110 (1999) *55-56, 73-74 (Hebrew); A. Ben-Tor, "Jokneam" in E. Stern ed. *The New Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land*. New York: Simon and Schuster, 1993, pg. 807.

- 7) L. Younger, "Sargon II" in W. Hallo ed. *Context of Scripture*, vol. 2, *Monumental Inscriptions from the Biblical World*. Leiden: Brill, 2000, pp. 296, 297.
- 8) R. Tappy, *The Archaeology of Israelite Samaria*. Vol. 2, *The Eighth Century B.C.E.* HSS 50. Winona Lake, Ind.: Eisenbrauns, 2001, pp. 222-26, 572-75.
- 9) Younger, "Sargon II" pp. 296-98.
- 10) H. Tadmor, "Fragments of an Assyrian Stele of Sargon II" in M. Dothan ed. *Ashdod*, vols. 2-3, *The Second and Third Seasons of Excavations, 1963, 1965, Soundings in 1967, Atiqot* English Series 9-10. Jerusalem: Israel Department of Antiquities and Museums, 1971, pp. 192-97.
- 11) M. Cogan, "Siege of Jerusalem" in W. Hallo ed. *The Context of Scripture*, vol. 2, *Monumental Inscriptions from the Biblical World*. Leiden: Brill, 2000, pg. 303.
- 12) Ibid.
- 13) N. Na'aman, "Sennacherib's Campaign to Judah and the Date of the LMLK Stamps" *Vetus Testamentum* 29 (1979) 61-86; http://www.lmlk.com/research/lmlk_corp.htm.
- 14) A. Mazar, "Three Israelite Sites in the Hills of Judah and Ephraim" *Biblical Archaeologist* 45 (1982) 174-176.
- 15) 地方部の住民の一部は、ユダ王国の施策として移住させられた可能性もある。(B. Halpern, "Jerusalem and the Lineages in the Seventh Century B.C.E.: Kinship and the Rise of Individual Moral Liability" in B. Halpern and D. Hobson eds. *Law and Ideology in Monarchic Israel*, 11-107. JSOTSupp 124. Sheffield, England: Sheffield Academic, 1991, pg. 27).
- 16) Y. Aharoni, "Excavations at Tel Arad: Preliminary Report on the Second Excavation Season, 1963" *Israel Exploration Journal* 17 (1967); Miriam Aharoni, "Preliminary Ceramic Report on Strata 12-11 at Arad Citadel" *Eretz Israel* 15 (1981) 181-204 (Hebrew); Zev Herzog, Miriam Aharoni, Anson Rainey, and Shmuel Moshkovitz, "The Israelite Fortress at Arad" *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 254 (1984) 1-34.
- 17) 中庭南東の角の小部屋でも柱像の断片が発見されている。Raz Kletter, *The Judean Pillar Figurines and the Archaeology of Asherah*. BAR International Series 636, Oxford: Tempus Reparatum, 1996, pp. 211-12; Herzog, *et al.*, "The Israelite Fortress at Arad" 16, fig. 20.
- 18) Y. Aharoni, "Excavations at Tel Arad" 247-49; Y. Aharoni, "Arad: Its Inscriptions and Temple" *Biblical Archaeologist* 31 (1968) 20-32.
- 19) Herzog, *et al.*, "The Israelite Fortress at Arad" 1-34; Y. Yadin, "A Note on the Stratigraphy of Arad" *Israel Exploration Journal* 15 (1965) 180; O. Zimhoni, "The Iron Age Pottery of Tel Eton and its Relationship to the Lachish, Tell Beit Mirsim and Arad Assemblages" *Tel Aviv* 12 (1985) 84-86; A. Mazar and E. Netzer, "On the Israelite Fortress at Arad" *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 263 (1986) 87-90; D. Ussishkin, "The Date of the Judean Shrine at Arad" *Israel Exploration Journal* 38 (1988) 149-51; Z. Herzog, "The Stratigraphy of Israelite Arad: A Rejoinder" *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 267 (1987) 77-79; Z. Herzog, "The Date of the Temple at Arad: Reassessment of the Stratigraphy and the Implications for the History of Religion in Judah" in A. Mazar ed. *Studies in the Archaeology of the Iron Age in Israel and Jordan*. JSOTSupp 331. Sheffield, 2001, pp. 161-62.

- 20) D. Pardee, "Arad Ostraca" in W. Hallo ed. *The Context of Scripture III: Archival Documents from the Biblical World*. Leiden, Boston: Brill, 2002, pp. 81-85; Y. Aharoni, *Arad Inscriptions*. Jerusalem: Israel Exploration Society, 1981, pp. 30-31, 35-38, 42.
- 21) 以下の著作に、ここに挙げた事例の多くが取り上げられている。Z. Zevit, *The Religions of Ancient Israel: A Synthesis of Parallaxic Approaches*. London: Continuum, 2001.
- 22) M. Smith, *The Early History of God: Yahweh and the Other Deities in Ancient Israel*. 2nd ed. Grand Rapids, MI: Eerdmans and Dearborn, MI: Dove Booksellers, 2002, pp. 47-48.